

東京スカイツリーを完成させたばかりの大手ゼネコンの大林組が2月20日、地上と宇宙を往復できる「宇宙エレベーター」を2050年に実現させると発表し世間の度肝を抜いた。鋼鉄の20倍以上の強度を持つ炭素繊維「カーボンナノチューブ」のケーブルを伝い、30人乗りのかごが、高度3万6000キロのターミナル駅まで1週間かけて向かう計画という。

建設方法はまず静止軌道上に人工衛星を設置、ケーブルの“最初の本”はロケットで宇宙に送り、下に向かって垂らして地上と結び、それをガイドにしてケーブルをさらに何本も張って太くし、構造物を構築するという“巨大吊り橋建設”と同じ手法だ。専門家によるとこの構想は夢や絵空事ではなく実現可能だそうで、すでにアメリカのNASAは2031年の実現を目指して開発中な上、日本でも“宇宙エレベーター競技会”が毎年開催されているという。

大林組はこの構想はスカイツリー建設に“刺激を受けて”生まれたと言ってるが、人が天を仰ぐ時それを目指すのは人の性なのか、世界最古の書物、聖書の創世記 11章でも、古代の人々が天まで届く塔を立て、神に近づき名を上げようとするも、神の怒りによって頓挫する「バベルの塔」の話は有名だ。問題は塔を立てたことではなく、人が「神に造られたこと」を忘れ、「神になろうする」傲慢さにあり、今日でもよくある話だ。

一方キリストは、宇宙エレベーターを嘲笑うが如く言う。

「もっと偉大なことをあなたは見ることになる。天が開け、神の天使たちが人の子の上に昇り降りするのを、あなたがたは見ることになる。」ヨハネの福音書 1章 50-51節：共同訳

と。やがて彼が帰って来た時それは実現する。神を恐れよう。 2012-5-24

